

## 地域スポーツ集団の存続と変容

—— 津市婦人バレーボールクラブの事例研究 ——

### A Sociological Study of Community Sports Groups

—The Affect of Group Longevity upon Group

Internal Factors in Volleyball Playing Housewives—

中 島 豊 雄<sup>\*1</sup>    坪 田 暢 允<sup>\*2</sup>    寺 沢      猛<sup>\*3</sup>  
西 垣 完 彦<sup>\*4</sup>    藤 田 匡 肖<sup>\*5</sup>    山 本 英 毅<sup>\*6</sup>

Toyoo Nakashima<sup>\*1</sup>, Nobumitsu Tsubota<sup>\*2</sup>, Takeshi Terasawa<sup>\*3</sup>, Hirohiko Nishigaki<sup>\*4</sup>,  
Masanori Fujita<sup>\*5</sup>, and Hideki Yamamoto<sup>\*6</sup>

The purpose of this study was to investigate the interrelationship between group longevity and internal group factors of community sports groups. It will be shown that the continuous function of community sports groups depends upon a dynamic relationship between the external and internal factors of a group.

In a previous study, attention had been focused on external influencing factors effecting community sports groups.

Correspondently, it is with this study that internal factors will be addressed. The study had been undertaken with two aims. One was to determine the significant factors influencing community sports groups. The other was to determine the effects of change upon the group longevity through the interplay such factors.

The subjects of this investigation were 56 groups participating in recreational volleyball for housewives' division. The total amount of participants studied were 540, whose age ranged from 23 to 48 years old and living in Tsu-City, Mie prefecture. The city is a middle-sized (142,561 pop.) industrialized city in Japan.

The results are as follows:

1. The groups longevity is strongly interrelated with skill level.  
The longer a group had been together, the higher skill was evidenced.
2. The groups of the higher longevity tended to place greater stress on winning.
3. There is an interrelationship between a group's skill level and the participation of its members in school sports programs.
4. The higher longevity groups tend to recruit players of a higher skill level.
5. The higher longevity groups tended to have its members associate more often personal contact. They might have contact through such ways as trips, parties, etc.
6. Members of the higher longevity groups as apposed to lower longevity groups, tend to higher self-expressions of satisfaction in regards to health, fitness and well-being.

\*1 名古屋大学総合保健体育科学センター \*2 名古屋学院大学 \*3 豊橋技術科学大学 \*4 愛知県立芸術大学

\*5 三重大学 \*6 日本福祉大学

\*1 Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University \*2 Nagoya Gakuin University

\*3 Toyohashi Technical University \*4 The Aichi Prefectural University of Fine Arts \*5 Mie University

\*6 Japan University of Social Welfare College

## 目 的

本研究は、地域社会における婦人バレーボール集団の存続に関与する要因とその変容を究明することを目的としている。

地域社会におけるスポーツ集団、とくに地縁的結合を基盤に成立している地域スポーツ集団は、学校や職場のスポーツ集団とは異なり、地域社会のさまざまな社会的、文化的条件によって規定されるところが大きく、その存在形態は多様で流動的である。

そのため、地域スポーツ集団の存続に関する研究は、集団をとりまく外部的条件との関連において把握することが不可欠の要件である。

この点に関して、寺沢<sup>1)</sup>は地域スポーツ集団の形成、存続、発展に働く社会的要因が特定のスポーツ種目に独自にみられるものと、各スポーツ種目に共通にみられるものとが存在していることを明らかにしている。また中島<sup>2)</sup>は地域スポーツ集団（軟式野球チーム）が存続していくために必要な外部的条件として、①安定した集団的基盤 ②練習に利用できる施設 ③集団目標に適合した組織、大会の3つの要因を明らかにしている。

しかしながら、1972年の保健体育審議会の「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」の答申以来、体育・スポーツを普及・振興するための諸条件が地域社会に整備されてきており、地域スポーツ集団の研究は、集団の外部的条件からの究明ばかりではなく、集団の内部的条件からの究明が重要な課題になってきている。

スポーツ集団の内部的要因に関する研究には、丹羽<sup>3)</sup> 東山<sup>4)</sup>をはじめとしてすぐれた研究が数多くあるものの、これらは学校運動部を取りあげており、地域社会の現実的生活条件に直接対応したかたちで成立する地域スポーツ集団に関しては、ほとんど関心がはられてはいない。

一方、地域スポーツ集団の今日的課題のひとつに、結成後のスポーツ集団育成の問題があるが、そのすじ道を明らかにするためにはスポーツ集団の変容過程を詳細に解明する必要がある。なぜなら、地域社会におけるスポーツ組織や大会のあり方、スポーツ施設の管理・運営の方法などの集団の外部的条件の差異によって、地域スポーツ集団はその内部的要因を変化させ、存続・発展のさまざまな形態をとるであろうと考えられるからである。

しかし、これまでに地域スポーツ集団の存続と変容を取り上げた研究はきわめて少なく、それに類するものとして寺沢<sup>1)</sup> 影山<sup>5)</sup> 中島<sup>2)</sup> 湯谷<sup>6)</sup> 川西<sup>7)</sup> J. Cikler<sup>8)</sup> 等の研究がある。これらの研究は、集団の存続を規定するさまざまな要因を検討しているが、集団の変容の視点からの分析を行ってはいない。

G. Cホマンズの指摘するように、集団は外部的条件と内部的条件のダイナミックな関係を維持しながら存続している。<sup>9)</sup>したがって、スポーツ集団の存続に関する研究は、この両者のダイナミックな関連の追求でなければならない。しかしながら、地域スポーツ集団の存続は多様な外部的条件と内部的条件が錯綜しながら関与しており、地域スポーツ集団の存続の問題をこの両者の相互関係から直ちに究明することは、今日までのスポーツ集団に関する研究の多くが、集団の外部的条件や内部的条件のいずれかに重点を置いたものが多いだけに、研究成果の蓄積がとぼしく、かなり困難な作業である。

したがって、両者の関係をダイナミックに究明する前段階として、地域スポーツ集団の存続に関与する外部的要因と内部的要因とをそれぞれ個別に確定することが必要となろう。そこで本研究では、上記の集団的基盤、利用可能な施設、組織・大会の3つの外部的条件が比較的類似している婦人バレーボール集団を取り上げることによって、スポーツ集団の存続に関与する内部的条件を究明するとともに、集団の存続と変容について検討することにする。

## 方 法

### 1. 対 象

調査の対象は、津市婦人バレーボール協議会加盟の60クラブ、769名である。なお、本研究に用いられたデータは、56クラブの集団調査と540名の個人調査から得られたものである。競技レベル別クラブ数および成員の年齢構成は表1、2のとおりである。

### 2. 方 法

質問紙法（集団調査と個人調査の2調査を実施）と面接聴取法を併用した。

表1 競技レベル別クラブ数

所属	一部	二部	三部	四部	五部	計
クラブ数	12 (21.4)	11 (19.6)	12 (21.4)	11 (19.6)	10 (10.9)	56 (100)

表2 年令 構成

年令	23～ 31才	32～ 35才	36～ 39才	40～ 48才	計
人数	83 (15.4)	140 (25.9)	171 (31.7)	146 (27.0)	540 (100)

### 3. 調査内容

「集団に関する調査」内容の概略

①存続年数 ②構成員(年令, 所属年数) ③母体(結成時と現在の仲間) ④加盟団体 ⑤経費(年間経費, 会費, 経費調達の方法) ⑥規約 ⑦指導者の種類 ⑧競技レベル(1～5部) ⑨大会参加(大会の種類, 回数, 成績) ⑩年間の試合数 ⑪練習活動(練習の形態, 回数, 時間帯, 場所, 参加状況) ⑫交流活動(旅行, ハイキング, 会食などの行事の種類, 回数) ⑬具体的目標(目標としている大会, 成績) ⑭試合の出場選手決定の原則 ⑮加入条件(人柄か運動技術か) ⑯会員の勧誘 ⑰選手決定の重点(参加態度か技術か) ⑱退部者数 ⑲退部の理由 ⑳クラブ活動の現状に対する評価(練習参加, 試合参加, 大会成績, 人間関係, 相互交流) ㉑スポーツグループの誘発 ㉒社会的活動(スポーツ条件の整備, 奉仕活動) ㉓社会的活動への参加意志 ㉔大会・試合の運営に対してのクラブの意見反映 ㉕社会的理解

「個人に関する調査」内容の概略

①年令 ②学歴 ③職業 ④家族構成 ⑤居住地の特性 ⑥居住形態 ⑦居住年数 ⑧定住意志 ⑨コミュニティ意識 ⑩スポーツ関係の役職経験 ⑪学校時代の運動経験(運動部経験, バレーボール部経験, 所属年数) ⑫学校時代の競技大会出場経験(大会名, 種目, 年令) ⑬現クラブ所属年数 ⑭現在のスポーツ実施(種目, 回数, 場所, 仲間) ⑮大会・試合の出場率 ⑯大会・試合の

出場意欲 ⑰クラブ加入の動機 ⑱クラブ所属継続の目的 ⑲クラブ継続の意志 ㉑クラブ活動の効果に対する評価(健康と体力, 気分転換, 技術向上, 仲間意識, スポーツの楽しみ, 人間的接触の満足感) ㉒クラブの現状に対する評価(試合の成績, 試合の参加, 練習の参加, 人間関係, 相互交流) ㉓余暇時間 ㉔余暇満足度 ㉕運動不足感 ㉖体力感 ㉗体力増強の目的

### 4. 調査時期

1979年4月～5月

### 5. 分析の視点と方法

地域スポーツ集団の存続と変容を究明する場合, 次の3つの視点からの検討が必要である。

第1は, 集団の2つの機能, いわゆる集団維持機能と目標達成機能の視点からの分析である。すなわち, 集団の存続と変容が, この2つの機能とどのような関連にあるかを検討することである。

第2は, 集団の内部的要因と外部的要因の視点からの分析である。本研究では, 外部的要因の類似している集団を取り上げているので, 主な分析視点は内部的要因に向け, 集団の存続と集団の内部的要因との関係を検討することになる。

第3は, 集団に所属する個人的特性の視点からの分析である。すなわち, 集団の存続に関与する個人的要因および集団の存続と個人の態度・意識との関係を検討することである。

以上3点から, 蒐集されたデータを分析した。具体的には,

Iでは集団の概要と参加者の特性をみる。

IIでは集団の存続に関与する要因と集団の変容を検討する。

クラブが設立されてからの存続年数別に表3に示すように, 調査標本を4段階に分類し, それと調査項目(要因)との関連性の検定をカイ自乗検定で行い, 危険率5%水準以下のものを関連性ありとみなし, その関連度の強弱をみるためにクラーの関連係数を算出した。

表3 存続年数別 集団数と成員数

分類	A 群	B 群	C 群	D 群	計
存続年数	2～3年目	4～5年目	6～10年目	11～15年目	
集団数	11 (19.6)	15 (26.8)	16 (28.6)	14 (25)	56 (100)
成員数	97 (18.0)	141 (26.1)	164 (30.4)	138 (25.6)	540 (100)

Ⅲでは要因間の相互分析と、集団の存続パターンを明らかにする。要因間の関連性の検定はⅡと同じ。

なお調査結果の統計的処理は名古屋大学大型計算機センターのFACOM230-60/75を利用して行った。

## 結 果 と 考 察

### I 集団と成員の概要

調査対象となった津市婦人バレーボールは1966年に開催されたバレーボール大会を契機に生まれた。当時の参加集団(クラブ)は、わずか7集団であったが、その後津市婦人バレーボール協議会が結成され、現在では60集団、769名が加盟している。これらの集団は、技術レベルにもとづいて5つのブロックに分かれており、各ブロックごとに開かれる春秋の大会を中心に活動が展開されている。なお、大会成績によって、各ブロックの入れ替えが行われており、1部がもっとも強い。集団の結成時における母体は、主に婦人会やPTAであったが、現在では80.4%が学区別による地域単位によって構成されている。1集団の構成員数は13人が最も多く、平均構成員数は12人である(図1参照)。集団の存続年数は2~15年と分散している。

年令についてみると、成員の90%は30~44才で占められており、この年代に限ってみれば、津市の女性は25人に1人の割合で婦人バレーボールに参加していることになる(表4)。集団所属年数は3~5年のものが最も多くて40.8%、9年以上のものが11.2%(図2)。練習は平日の夜、週1~2回がほとんどであり、それらは定期的に利用できる練習場所を確保している。

表4 津市の人口と婦人バレーボールクラブ参加率

総人口	女	30~44才までの女	クラブ参加率 $100 \times \frac{695}{16,805}$ (30~44才までの) クラブ参加者)
142,561	73,795	16,805	4.1%

クラブへの加入については人柄を重視し、試合時の選手決定には、日頃の練習への参加態度を重くみるが、その原則は勝敗にこだわらない無条件全員出場と、勝つ見込みのある場合に限り全員出

場させる条件つき出場とが半々である。

一方、社会的活動(スポーツ条件の整備や奉仕活動)の実践や、連盟の大会、試合の運営に主体的に参加している集団はきわめて少数である。

また、スポーツの問題を社会的問題として考えているものは少なく、スポーツを単なる趣味の問題と考えているものが約3分の1を占めている。しかし、多くの集団は成員の交流を深めるため喫茶店でくつろいだり、会合やハイキング、旅行などの行事をもっている(図5(1, 2, 3))。

成員の学校時代の運動部経験者は73.3%、そのうち54.6%はバレーボール部の所属経験をもっている。しかし、卒業後の運動経験は乏しく、現在のクラブに所属するまで運動をしなかったものが67.8%もいる(図3)。現在でも、バレーボール以外にこの1年間全くスポーツをしたことのない、いわゆるバレーボール単一型<sup>注1)</sup>のものが40.9%を占めている(図4)。

現在のバレーボールクラブを続けていく理由として、第1にあげているものはからだや健康に関わる理由がもっとも多く51.9%である。しかし、クラブ活動の効果に対しては全体的に高く評価しているが、健康・体力に関わるものより、気分転換とかスポーツの楽しさを評価するものが多い。

(なお、図1~5に示したものの以外の項目については、Ⅱのなかの表5~59に記載してある。)

### Ⅱ 集団の存続に関与する要因と集団の変容

ここでは、調査項目別に、存続年数の長い集団と存続年数の短い集団とを比較し、集団の存続に関与する要因および集団の変容を検討する。なお、存続年数を4つのカテゴリー(A, B, C, D)に分けたが、各カテゴリーに含まれる集団数および成員数は表3に示してある。

#### ＜集団に関する調査データ＞の分析

##### 1. 外部的要因

##### 1) 集団の母体との関連

まずはじめに、集団の外部的条件である集団の母体、練習施設、加盟団体の3つの要因との関連をみることにする。これらの3つの要因は、前述の軟式野球チームの存続を規定する3つの要因、すなわち、①安定した集団的基盤 ②練習に利用できる施設 ③集団目標に適合した組織・大会にそれぞれ対応するものである。



N=56	10人未満 (19.6)	11 人 (17.9)	12 人 (19.6)	13 人 (23.2)	14人以上 (19.6)
------	-----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------

図1 集団の構成員数

N=540	1年目 (21.4)	2年目 (14.5)	3～5年 (40.8)	6～8年目 (12.1)	9年目～ (11.2)
-------	---------------	---------------	----------------	-----------------	----------------

図2 現クラブ所属年数

N=540	クラブ 加入あり (11.3)	ある程度やっていた (20.8)	ほとんど、全くやっていなかった (67.8)
-------	-----------------------	---------------------	---------------------------

図3 卒業後の運動経験（現クラブ所属以前）

N=540	単一型（1年間バレー以外なし） (40.9)	複合型（Ⅰ） (23.1)	複合型（Ⅱ） (24.1)	総合型 (11.9)
-------	---------------------------	------------------	------------------	---------------

図4 現在のスポーツ実施のタイプ

## ① 練習や試合後のくつろぎ

N=56	いつも (10.7)	ときどき (42.9)	あまりない (26.8)	全くなし (19.6)
------	---------------	----------------	-----------------	----------------

## ② 旅行

N=56	やっている (23.2)
------	-----------------

## ③ ハイキング・会食

N=56	やっている (53.6)
------	-----------------

図5 交流活動の内容

表5, 6は, 集団の母体（結成時点と現時点）と存続年数との関連をみたものである。両者とも, 存続年数とは有意な関連がみられない。結成時点と現時点とを比較してみると, 集団の母体が「同じ地域・町内」にうまく移行することが集団の存続のひとつの必要な条件になっていると思われる。しかし, 「同じ地域・町内」と「PTA・婦人会」は成立基盤は異にするが, いずれも地縁的性格の強いものであって, 集団の基盤は同質であるとみてよい。

## 2) 練習施設との関連

表7に示すように, 練習施設は存続年数と関連がみられない。これは, 津市婦人バレーボール集団のほとんどが, 定期的に利用できる練習施設をもっていることからくる結果であると考えられる。

## 3) 加盟団体との関連

表8に示すように, 加盟団体数は存続年数と関連がみられない。津市婦人バレーボール集団は, 津市婦人バレーボール協議会に加盟し, 競技レベル別に, 5ブロックに分けられており, 各集団はその技術レベルに対応した1～5部のいずれかに所属している。したがって, 各集団は, 目標に適合した組織・大会をもっているという点では同一

条件にあるといつてよい。

以上にみるように, 津市婦人バレーボール集団は, 集団の存続に必要な3つの外部的条件を具備しており, しかもそれらの条件は, 各集団に共通しているといつてよい。そのため, 集団の存続年数とこれらの3要因とは関連がみられなくなっていると思われる。

## 2. 内部的要因

ここでは, 調査項目を便宜に, 1)主に目標達成機能に関する項目 2)主に集団維持機能に関する項目 3)その他の項目に分けて, それらと存続年数との関連をみることにする。

## 1) 目標達成機能に関する項目との関連

## (1) 競技レベル

表9は, 競技レベルと存続年数との関連をみたものである。これによると, 存続年数は競技レベルと強い関連がある ( $\sqrt{r}=0.505$ )。すなわち, 存続年数の最も長いD群では, 競技レベルの高い1部, 2部に属する集団が85.7%ときわめて高く, C群が62.6%とそれに次いでいる。一方, 存続年数が短いB群とA群は, 競技レベルの低い4部, 5部に所属している集団がそれぞれ60%, 90.9%

存続年数	N	表 5		表 6		表 7				表 8			表 9					表 10		表 11	
		結成時の仲間		現在の仲間		練習施設				加盟団体数			競技レベル					年間の試合数		大会参加回数	
		同じ地域・町内	P・T・A・婦人会	同じ地域・町内	P・T・A・婦人会	学	公	あ	な	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	三	四
						校	共	り	し	種	種	上	部	部	部	部	部	試	試	回	回
						校	共	り	し	種	種	上	部	部	部	部	部	合	合	以	以
						校	共	り	し	種	種	上	部	部	部	部	部	下	上	下	上
A群(2~3年目)	11	54.5	45.5	63.6	37.4	90.9	9.1	90.9	9.1	54.5	36.4	9.1			9.1	36.4	54.5	72.7		81.8	
B群(4~5年目)	15	40.0	60.0	73.3	26.7	93.3	6.7	93.3	6.7	53.3	40.0	6.7		6.7	33.3	40.0	20.0	53.3	46.7	66.7	33.3
C群(6~10年目)	16	37.5	62.5	87.5	12.5	93.7	6.3	100		25.0	68.8	6.3	31.3	31.3	31.3		6.3	43.8	56.2	56.3	43.7
D群(11~15年目)	14	35.7	64.3	92.9	7.1	92.9	7.1	92.9	7.1	35.7	50.0	14.3	50.0	35.7	7.1	7.1		28.6	64.3	57.1	42.9
計	56	41.1 (23)	58.9 (33)	80.4 (45)	19.6 (11)	92.9 (52)	7.1 (4)	94.6 (53)	5.4 (3)	41.1 (28)	50.0 (23)	8.9 (5)	21.4 (12)	19.6 (11)	21.4 (12)	19.6 (11)	17.9 (10)	48.2 (27)	44.6 (25)	66.7 (36)	32.1 (18)

注 1. 表中NA, DKを除いてあるので、100にならないものがある。  
 2. 表のNはNAを除くものである。(以下、同じ)

在続年数	N	表 12			表 13				表 14			表 15			表 16				
		練習の形態			練習回数				練習時間帯(平日)			練習の参加状況			交流活動				
		練習日はきまっている	大体系きまっている	きまっていない	週三回	週二回	週一回	週一回未満	午	午	夜	全員(90/100%)	半数以上(70/80%)	約半数以下	多	普	少	な	
A群(2~3年目)	11	54.5	45.5		27.3	72.7		18.2	9.1	72.7	27.3	36.4	36.4	9.1	9.1	45.5	36.4		
B群(4~5年目)	15	93.3	6.7		66.7	33.3		20.0	13.3	66.7	20.0	60.0	20.0	33.3	33.3	33.3			
C群(6~10年目)	16	87.5	12.5		56.3	37.5	6.3	6.3	18.8	75.0	25.0	62.5	12.5	37.5	31.3	25.0	6.3		
D群(11~15年目)	14	78.6	14.3	7.1	35.7	57.1			14.3	85.7	28.6	35.7	35.7	35.7	14.3	35.7	14.3		
計	56	80.4 (45)	17.9 (10)	1.8 (1)	48.2 (27)	48.2 (27)	1.8 (1)	10.7 (8)	14.3 (8)	75.0 (42)	25.0 (14)	50.0 (28)	23.2 (13)	30.7 (17)	23.2 (13)	33.9 (19)	12.5 (7)		

		表 17				表 18				表 19		表 20		表 21		表 22		表 23		
存続年数	N	成 員 の 流 動 性				技 術 指 導 者				クラブ経営		クラブの規約		出場選手決定の原則 (勝利志向か全員出場か)		加入条件 (入札か運動技術)		集 団 の 具体的目標		
		小	普	大	※ (N)	ク ラ ブ	部 外 員	ク ラブ 員と 部外者	な い	会 費 の み	会 費 + ス ポ ン サ ー	あ る	な い	会 員 出 場	勝 利 志 向		考 慮 す る	考 慮 し な い	あ り	な し
															交 件 つ き 全 員 出 場	勝 利 第 一 ・ そ の 他				
A群(2～3年目)	11					27.3	36.4	18.2	18.2	90.9	9.1	18.2	81.8	45.5	27.3	29.3	27.3	72.7	54.5	45.5
B群(4～5年目)	15	50.0	30.0	20.0	(10)	26.7	66.7		6.7	100		26.7	73.3	60.0	33.3	6.7	66.7	33.3	60.0	40.0
C群(6～10年目)	16	31.3	43.8	25.0	(16)	25.0	37.5	18.8	18.8	100		37.5	62.5	50.0	37.5	12.5	53.3	46.7	56.3	43.8
D群(11～15年目)	14	21.4	28.6	50.0	(14)	35.7	21.4	21.4	21.4	78.6	21.4	42.9	57.1	21.4	64.3	14.3	71.4	28.6	57.1	42.9
計	56	23.2 (14)	25.0 (14)	23.2 (13)	(40)	28.6 (16)	41.1 (23)	14.3 (8)	16.1 (9)	92.9 (52)	7.1 (4)	32.1 (18)	67.9 (38)	44.6 (25)	41.1 (23)	14.3 (8)	56.4 (31)	43.6 (24)	57.1 (32)	42.9 (24)

		表 24		表 25		表 26		表 27		表 28		表 29		表 30	
続 年 数	存  														

と高い。

このように、集団は存続年数が長くなるにしたがって競技レベルは高くなり、短くなるにしたがって低くなっている。

## (2) 年間の試合数

表10は、年間の試合数を6試合以下と7試合以上とに分けて、それと存続年数との関連をみたものである。これによると、存続年数は、年間の試合数と有意な関連がある。すなわち、存続年数の長い集団は年間の試合数が多く、短い集団は少なくなっている。

## (3) 大会参加回数

表11は、大会参加回数と存続年数との関連をみたものである。両者間に有意な関連はみられないが、A群の大会参加回数は他の群と比べて少なくなっている。

## (4) 練習の形態、回数、時間帯、参加状況

表12-15に示すように、練習の形態、回数、時間帯、参加状況は、いずれも存続年数と関連がみられない。A、D群の練習回数がやや少ない傾向がみられる程度で、全体としては存続年数と練習活動とは有意な関連がみられない。これはほとんどの集団が、定期的に週1~2回、夜間に練習活動を行っていることによるものであろう。

以上にみるように、ほとんどの集団には定期的に利用できる施設があり、集団の練習条件はほぼ同一である。このような集団にとっては、集団が存続していくために必要な条件は、練習活動であるというよりも競技レベルが高く、よい成績をあげ、多くの大会や試合に参加する機会をもつことであると考えられる。

## 2) 集団維持機能に関する項目との関連

### (1) 交流活動

表16は、集団の交流活動<sup>注2)</sup>と存続年数との関連をみたものである。これによると、A群とB、C、D群との間に有意差がみられる。すなわち、C、D群はA群と比較して交流活動が多くなっている。

### (2) 成員の流動性

表17は、成員の流動性<sup>注3)</sup>と存続年数との関連をみたものである。これによると、成員の流動性は存続年数と有意な関連がある。すなわち、D群はB、C群と比較して成員の流動性が大きくなっ

ている。これは、B、C群では結成後間もない時期に加入した成員が多く残留しているが、D群の場合には最近の加入者が多くなっていることを示している。このことは、換言すれば、集団が長期に存続していくためには、成員の加入、離脱が適切に行われることが重要な条件であることを示していると思われる。

## 3) その他の項目との関連

### (1) 指導者、経費、規約との関連

表18, 19, 20は、技術指導者の有無、種類、クラブ経費の調達方法、クラブ規約と存続年数との関連をみたものである。これによると、存続年数が長くなるにしたがってクラブ規約が“ある”とする集団がやや多くみられるものの、これらの3つの要因はいずれも存続年数とは有意な関係がみられない。

### (2) 集団の運営方針に関する項目との関連

#### ① 試合の出場選手決定の原則（全員出場か勝利志向か）

表21は、試合の出場選手を決定する場合の基本方針として、勝つことよりも全員出場を重視するか、それとも全員出場よりも勝利を重視するかの違いから、集団の勝利志向の程度をとらえ、それと存続年数との関連をみたものである。これによると、D群とA、B、C群との間に有意差がみられる。すなわち、D群はA、B、C群と比較して、無条件出場の方針をとっている集団が少なく、勝利志向の方針をとっている割合が高い。

このことは、集団は長期に存続することによって勝利志向に傾斜していく可能性があることを示している。

#### ② 加入条件（人柄か運動技術か）

表22は、集団の加入条件と存続年数との関連をみたものである。これによると、A群とB、C、D群との間に有意差がみられ、A群には加入条件を考慮しない集団が多く、B、C、D群には加入条件を考慮する集団が多くなっている。

#### ③ 集団の具体的目標、会員の勧誘、選手決定の重点（技術か練習態度か）

表23, 24, 25は、集団の具体的目標、会員の勧誘、選手決定の重点と存続年数との関連をみたものであるが、いずれの項目とも有意な関連がみられない。

## (3) 社会的活動に関する項目との関連

## ① スポーツグループの誘発

表26は、スポーツグループの誘発と存続年数との関連をみたものである。これによると、D群とA、B、C群との間に有意差がある。すなわち、D群の場合には自分たちのクラブ活動に刺激されて、地域社会にスポーツグループが発生したとする集団が多くみられる。

## ② 社会的活動への参加

表27, 28は、社会的活動としてのスポーツ条件の整備および社会的奉仕活動と存続年数との関連をみたものである。これによると、いずれの項目も、存続年数とは有意な関連がみられない。

## ③ 連盟の大会・試合運営へのクラブの意見の反映、スポーツに対する社会的理解

表29, 30は、連盟の大会・試合運営へのクラブの意見の反映、スポーツに対する社会的理解と存続年数との関連をみたものであるが、いずれも有意な関連がみられない。クラブの意見が地域の大会や試合の運営などに反映したとする集団は、C群で1つ、D群で2つしかない。

以上のように、集団の社会的活動への参与はD群にやや多くみられるが、全般的に低い。仮説の段階では、存続年数が長くなることによって、集団の社会的参与が深まると考えたが、両者間に有意な関連を見い出すことはできなかった。

存続年数	N	表 31				表 32				表 33				表 34				表 35			
		年 令				学 歴				職 業				学校時代の運動部所属経験				学校時代のスポーツ関係経験(運動経験者のみ)			
		1	32	36	40	小・中学校卒	高校卒	大学卒	その他	主	定	バ	イ	あ	な	あ	な	あ	な	あ	な
		31	1	1	才	才	35	39	1	才	35	39	1	才	35	39	1	才	35	39	1
A群(2~3年目)	97	18.6	32.0	27.8	21.6	28.9	58.8	9.3	1.0	54.6	36.1	9.3	62.9	36.1	26.8	36.1	(61)				
B群(4~5年目)	141	12.8	26.2	44.0	17.0	26.2	61.0	10.0	0.7	70.9	27.0	2.1	70.0	29.8	29.1	39.8	(97)				
C群(6~10年目)	164	12.2	29.3	29.9	28.7	20.7	67.7	9.8	1.2	69.5	28.7	1.8	72.6	26.8	38.4	34.1	(119)				
D群(11~15年目)	138	19.6	17.4	23.9	39.1	25.4	55.8	15.2	1.4	51.4	42.0	6.5	85.5	14.5	61.6	22.5	(117)				
計	540	15.4 (83)	25.9 (140)	31.7 (171)	27.0 (146)	24.8 (134)	61.3 (331)	11.1 (60)	1.1 (6)	62.6 (338)	33.0 (178)	4.4 (24)	73.3 (396)	26.1 (141)	54.6 (215)	45.2 (178)	(394)				

存続年数	N	表 36						表 37						表 38					
		学校時代のバレーボール部所属年数(運動部経験者)						学校時代の大会出場経験						大会・試合の参加程度					
		1	二	四	六	異	※	県	県	その	その	全	い	だ	と	は	全		
		一	年	年	年	種	(N)	大	内	他	他	全	つも	いた	き	と	く		
A群(2~3年目)	97	11.5	26.2		1.6	60.7	(61)	13.4	9.3	14.4	26.8	36.1	56.7	20.6	10.3	7.2	2.1		
B群(4~5年目)	141	4.1	34.0	2.1	4.1	55.7	(97)	22.7	7.8	16.3	23.4	29.8	61.7	20.6	9.2	2.8	4.3		
C群(6~10年目)	164	5.8	28.9	9.1	9.9	46.3	(121)	22.6	13.4	18.9	21.3	23.8	56.1	32.3	4.9	2.4	1.8		
D群(11~15年目)	138	5.1	42.7	4.3	19.7	28.2	(117)	34.8	13.8	12.3	26.1	13.0	64.5	16.7	9.4	3.6	4.3		
計	540	6.1 (24)	33.8 (134)	4.5 (18)	10.1 (40)	45.5 (180)	(396)	24.1 (130)	11.3 (61)	15.7 (85)	24.1 (130)	24.8 (134)	59.8 (323)	23.1 (125)	8.1 (44)	3.7 (20)	3.1 (17)		

		表 39					表 40					表 41					表 42				
存続年数	N	大会、試合の出場意欲					クラブ所属継続の意志					クラブ所属継続の目的					スポーツの効果(健康と体力)				
		ぜひとも出場しない	できれば出場したい	あまり出場したくない	出場したくない	どちらともいえない	ぜひ続けていきたい	できれば続けていきたい	ついでにやめようと思	うと思	その	身体的・健康的理由	社会的・親睦的理由	かかわる理由	技術的理由	非常に効果がある	かなりの効果がある	少し効果がある	ない	どちらともいえない	
A群(2～3年目)	97	33.0	53.6	4.1	1.0	8.2	36.1	56.7	6.2		1.0	53.6	13.4	28.9	3.1	4.1	34.0	16.5	3.1	42.3	
B群(4～5年目)	141	31.2	57.4	7.1		2.8	46.1	49.6	4.3			55.3	10.0	34.0		9.2	32.6	16.3	2.8	39.0	
C群(6～10年目)	164	20.7	71.3	3.0		3.7	33.5	61.6	2.4	0.6	0.6	54.9	18.3	26.2	0.6	14.0	34.1	9.8	1.8	39.0	
D群(11～15年目)	138	23.2	63.0	5.8	0.7	6.5	37.0	54.3	6.5		2.2	43.5	13.8	42.0	0.7	10.1	35.5	13.0	2.2	37.7	
計	540	26.3 (142)	62.4 (337)	5.0 (27)	0.4 (2)	5.0 (27)	38.3 (208)	55.7 (301)	4.6 (25)	0.2 (1)	0.9 (5)	51.9 (280)	14.1 (76)	32.8 (177)	0.9 (5)	10 (54)	34.1 (184)	13.5 (73)	2.4 (13)	39.3 (212)	

表 43

表 44

表 45

表 46

存続年数	N	スポーツの効果(2) 気分転換					スポーツの効果(3) 技術向上のよこび					スポーツの効果(4) 仲間意識					スポーツの効果(5) スポーツの楽しみ				
		非常に役立つ	かなり役立つ	少し役立つ	ない	どちらともいえない	いつも感ずる	ときどき感ずる	ときたま感ずる	感じない	どちらともいえない	非常に強く感じる	かなり感じる	少し感じる	ない	どちらともいえない	よくある	ときどきある	ときたまある	ない	どちらともいえない
A群(2-3年目)	97	28.9	40.2	18.6	1.0	10.3	8.2	30.9	19.6	12.3	23.7	16.5	22.7	18.6	9.3	29.9	20.6	27.8	11.3	23.7	14.4
B群(4-5年目)	141	30.5	56.7	9.2	0.7	2.1	6.4	44.0	22.7	5.0	20.6	13.5	37.6	18.4	2.8	26.2	26.2	34.8	13.5	9.2	16.3
C群(6-10年目)	164	29.9	50.6	8.5	1.2	7.9	5.5	40.9	25.0	7.3	20.1	17.7	41.5	14.0	5.5	19.5	22.0	33.5	14.0	11.6	16.5
D群(11-15年目)	138	31.2	47.1	8.7		10.1	5.1	34.8	23.9	2.9	30.4	13.8	45.7	13.8	2.2	23.2	19.6	41.3	13.8	11.6	12.3
計	540	30.2 (163)	49.4 (267)	10.6 (57)	0.7 (4)	7.4 (40)	61.1 (33)	38.3 (207)	23.1 (125)	6.5 (35)	23.5 (127)	15.4 (83)	38.1 (206)	15.9 (86)	4.6 (25)	24.1 (130)	22.2 (120)	34.8 (188)	13.3 (72)	13.1 (71)	15.0 (81)

表 47

表 48

表 49

表 50

表 51

存続年数	N	クラブ活動の現状(1) 人間関係			クラブ活動の現状(2) 練習への参加			クラブ活動の現状(3) ゲームの参加			クラブ活動の現状(4) ゲームの成績				クラブ活動の現状(5) 相互交流				
		非常に満足	まあまあ満足	あまり満足でない	非常によい	よ	あまりよくない	非常によい	よ	あまりよくない	大い	や	大い	非常によい	まあまあ	あまりよくない	全くない		
A群(2～3年目)	97	10.3	77.3	12.4	13.4	59.8	25.8	1.0	21.6	69.1	8.2	1.0	39.2	42.3	15.5	10.3	64.9	19.6	2.1
B群(4～5年目)	141	23.4	70.2	5.7	9.2	65.2	24.8	0.7	17.7	65.2	15.6	2.1	45.4	36.2	13.5	13.5	74.5	10.6	
C群(6～10年目)	164	26.8	65.2	6.7	12.8	67.1	16.5	1.8	32.9	57.3	8.5	6.1	47.6	40.2	2.4	23.2	62.8	9.8	0.6
D群(11～15年目)	138	31.9	61.6	5.8	20.3	46.4	32.6	0.7	33.3	60.9	5.8	5.8	65.9	23.9	2.9	13.0	69.6	14.5	
計	540	24.3 (131)	67.8 (366)	7.2 (39)	13.9 (75)	60.0 (324)	24.4 (132)	1.1 (6)	27.0 (146)	62.4 (337)	9.6 (52)	4.1 (22)	50.2 (271)	35.4 (191)	7.8 (42)	15.7 (85)	68.0 (367)	13.0 (70)	0.6 (3)

表 52

表 53

表 54

表 55

表 56

表 57

表 58

存続年数	N	スポーツの価値観 Q スポーツは意味のあるもので、余裕のあるものであればよい		スポーツの価値観 Q スポーツが得意でないからといって社会的問題とすべきでない		スポーツの価値観 Q 自治体はスポーツのできる社会的条件をつくる義務がある		住居形態		居住年数		定住意志			コミュニティ意識								
		そう思う	そうは思わない	そう思う	そうは思わない	そう思う	そうは思わない	自宅内 （住宅）	自宅外	三 年 未 満	三 ~ 四 年	五 ~ 九 年	十 年 以上	ずっと住みたい	よそに移りたい	その他	共同体	ア ノ ミ	市 民 的	コ ミュ ニ ティ 的			
A群（2〜3年目）	97	33.0 (182)	40.2 (222)	26.8 (133)	46.4 (193)	21.6 (134)	30.9 (205)	33.0 (207)	23.7 (102)	41.2 (216)	70.1 (415)	26.8 (122)	7.4 (43)	13.7 (45)	35.8 (170)	43.2 (280)	76.3 (431)	9.3 (41)	8.2 (76)	21.6 (93)	1.0 (1.3)	8.2 (7)	68.0 (410)
B群（4〜5年目）	141	32.6	36.2	31.2	33.3	26.2	39.0	41.8	14.2	41.1	74.5	25.5	12.1	7.1	26.2	54.6	80.9	6.4	10.6	12.6	2.1	2.1	83.0
C群（6〜10年目）	164	36.0	37.2	25	34.8	22.6	40.2	35.9	19.5	40.2	81.7	18.3	6.1	6.1	34.8	53.0	77.4	7.9	10.4	15.9	1.2	4.3	76.2
D群（11〜15年目）	138	32.6	51.4	15.9	31.9	28.3	39.1	41.3	19.6	37.7	78.3	21.7	6.5	8.7	30.4	54.3	84.1	7.2	7.2	20.3	0.7	2.9	73.9
計	540	33.7 (182)	41.1 (222)	24.6 (133)	35.7 (193)	24.8 (134)	38.0 (205)	38.3 (207)	18.9 (102)	40 (216)	77.3 (415)	22.6 (122)	8.0 (43)	8.3 (45)	31.5 (170)	51.8 (280)	79.8 (431)	7.6 (41)	9.3 (50)	17.0 (92)	1.3 (7)	4.1 (22)	75.9 (410)

## ＜個人に関する調査データ＞の分析

## 1. 成員の属性と存続年数との関連

表31, 32, 33は, 年令, 学歴, 職業と存続年数との関連をみたものである。年令では, D群の40才以上が, 職業ではA, D群の専業主婦が若干多い程度で, 存続年数とこれら3要因とは有意な関連がみられない。

## 2. 成員の運動経験と存続年数との関連

表34, 35, 36, 37は, 運動経験と存続年数との関連をみたものである。学校時代の運動部所属経験, 学校時代のバレーボール部所属経験, 同所属年数, 学校時代の大会出場経験はいずれも存続年数と有意な関連がみられる。とくに, バレーボール部所属経験と大会出場経験は存続年数と強い関連

がある。

表36にみられるように, 存続年数の短い集団の成員は, 学校時代に運動部に所属してはいるが, その多くはバレーボール以外の運動部経験者である。一方, 存続年数の長い集団の成員は, バレーボール部経験者がきわめて多い。このことから, 存続年数が長くなるにしたがって, 集団は学校時代の運動部経験者, とくにバレーボール経験者を加入させる傾向を強めるように思われる。

## 3. クラブ活動の参加状況と存続年数との関連

表38, 39, 40は, 大会・試合の参加程度, 出場意欲, クラブ所属継続の意志と存続年数との関連をみたものであるが, いずれも存続年数とは有意な関連がみられない。このことは, 集団の存続が

直ちに大会や試合への参加率や出場意欲を高め、クラブ所属継続の意志を強化することにはならないことを示唆している。

#### 4. クラブ所属継続の目的と存続年数との関連

表41は、クラブ所属継続の目的と存続年数との関連をみたものである。両者間に有意な関連はみられないが、D群では、クラブ所属継続の目的として第1位に“スポーツの楽しさ”をあげるものが多く、それに対してA、B、C群では“健康と体力”をあげるものが多くなる傾向がみられる。

#### 5. クラブ活動の効果と存続年数との関連

表42～46は、クラブ活動の効果に関する5つの項目と存続年数との関連をみたものである。“仲間意識”は存続年数と有意な関連がみられるが、他の4項目は存続年数とは関連がみられない。反応内容からみて“健康と体力”“気分転換”“技術向上”“スポーツの楽しさ”などに関しては、集団の存続年数の長短とはかわりなく、成員はクラブ活動の効果に対しては一定の評価をしているものと思われる。これに対して“仲間意識”のような人間関係に関わる性質のものは、スポーツ活動の効果として成員に認知されるためには、一定期間集団が存続することが必要であるように思われる。このことから“仲間意識”の形成が集団を存続させていく要因として働いているとも考えられる。

#### 6. クラブ活動の現状に対する評価と存続年数との関連

表47～51は、クラブ活動の現状に対する5つの評価と存続年数との関連をみたものである。クラブ活動に対する5つの評価は、いずれも存続年数と有意な関連があり、存続年数の長い集団に所属する成員ほどクラブ活動の現状に満足しているものが多い。

#### 7. スポーツの価値観と存続年数との関連

表52, 53, 54は、スポーツの価値観に関する3つの項目と存続年数との関係をみたものであるが、いずれも有意な関連はみられない。これらの質問項目は、スポーツの問題を個人的次元で考えるか、それとも社会的次元で考えるかという価値観の違いについてみたものである。仮説の段階では、存続年数の長い集団に所属する成員は、スポーツの問題を個人的次元から社会的次元でとらえる態度

に変化しているのではないかと考えたが、それを明らかにすることはできなかった。しかし、A群の成員には、スポーツの問題を個人的次元で考えるものがやや多い傾向がみられる。

#### 8. 居住の特性と存続年数との関連

表55～58は、居住地の特性、居住形態、居住年数、定住意志、コミュニティ意識と存続年数との関係をみたものであるが、いずれも存続年数とは関連がみられない。本研究の調査対象や、対象者の特性からみて、このような要因は、婦人バレーボール集団の存続を直接規定する要因とはならないと思われる。

以上、調査項目別に存続年数に関与する諸要因をみてきたが、その関係をまとめてみると表60に示すとおりである。

### III 集団の存続パターン

IIでは、集団の存続パターンに関与する要因を個別的に検討し、集団の存続を規定すると思われる要因と集団の変容についてみてきた。しかしながら、集団の存続の様態をダイナミックに把握するためには、これだけでは十分でなく、これらの諸要因が相互にどのような関係にあるかが究明されなければならない。

そこで、次に前記の諸要因の相互関連分析を行った結果、集団の存続パターンを形成する主要因として、競技レベル、成員の流動性、交流活動、年間の試合数、集団の具体的目標の5つの要因が見い出された。つぎに、これらの諸要因の相互関連を分析、検討した結果、集団が存続して行く場合に、5つの存続パターンがあることが明らかになった。以下、これらの存続パターンの形成とその特性をみることにする。

前述したごとく、存続年数は競技レベルと強い関連があって、存続年数の長い集団の大部分は競技レベルの1部と2部に所属しており、一方存続年数の短い集団の大部分は競技レベルの4部と5部に所属していることから、まず、存続年数と競技レベルの2つの基準にもとづいて、表61に示すように、集団を6つに分類した。この分類は集団には2つのおもなタイプが存在していることを示している。すなわち、分類La「存続年数が長く、競技レベルの高い集団(22)」と分類Sa「存続年数が短く、競技レベルの低い集団(19)」である。

表60 存続年数と調査項目（要因）との関連

項 目 (要 因)			X <sup>2</sup> 検定	√G <sup>2</sup>	表 No.
個 人	属 性	年 令	_____	_____	3 1
		学 歴	_____	_____	3 2
		職 業	_____	_____	3 3
	地 域 的 特 性	居住地の特性	_____	_____	5 5
		住 居 形 態	_____	_____	5 6
		居 住 年 数	_____	_____	5 7
		定 住 意 識	_____	_____	5 8
		コミュニティ意識	_____	_____	5 9
	運 動 経 験	学校時代の運動部経験	※ ※	0.1 7 3	3 4
		学校時代のバレーボール部所属経験	※ ※	0.1 8 9	3 5
		学校時代のバレーボール部所属年数	※ ※	0.1 3 9	3 6
		学校時代の大会出場経験	※ ※	0.1 4 1	3 7
集 団	クラブ活動の参加に関する項目	大会，試合の参加程度	_____	_____	3 8
		大会，試合の出場意欲	_____	_____	3 9
		クラブ所属継続の意志	_____	_____	4 0
		クラブ所属継続の目的	_____	_____	4 1
	クラブ活動の効果に関する項目	健康と体力	_____	_____	4 2
		気 分 転 換	_____	_____	4 3
		技術向上のよろこび	_____	_____	4 4
		仲 間 意 識	※	0.1 1 9	4 5
		スポーツの楽しみ	_____	_____	4 6
	クラブ活動の現状に対する評価	人 間 関 係	※ ※	0.1 3 1	4 7
		練習への参加	※ ※	0.1 1 7	4 8
		試合への参加	※ ※	0.1 3 3	4 9
		試合の成績	※ ※	0.1 7 3	5 0
		相 互 交 流	※	0.1 1 6	5 1
	ス ポ ー ツ の 価 値 観	スポーツは趣味のもの，余裕のあるものがやればよい	_____	_____	5 2
		スポーツができないからといって社会的問題とすべきでない	_____	_____	5 3
		自治体はスポーツのできる社会的条件をつくる義務がある	_____	_____	5 4
集 団 的 要 因	外 部 的 要 因	集団の母体	_____	_____	5
		結成時の仲間	_____	_____	6
		現在の仲間	_____	_____	7
		練習施設	_____	_____	8
	内 部 的 要 因	加盟団体数	_____	_____	
		競技レベル	※ ※	0.5 0 5	9
		年間の試合数	※ ※	0.4 2 6	1 0
		大会参加回数	_____	_____	1 1
		練習形態	_____	_____	1 2
		練習回数	_____	_____	1 3
		練習時間帯（平日）	_____	_____	1 4
	維持機能に関する項目	練習の参加状況	_____	_____	1 5
		交流活動	※ ※	0.3 5 1	1 6
	其 他 の 項 目	成員の流動性	※	0.2 9 6	1 7
		指 導 者	_____	_____	1 8
		クラブ経費の調達方法	_____	_____	1 9
		規 約	_____	_____	2 0
		試合の出場選手決定の原則	_____	_____	2 1
		加入条件（人柄か運動技術か）	※	0.2 7 0	2 2
		具体的目標	※	0.2 9 1	2 3
		会員の勧誘	_____	_____	2 4
		選手決定の重点	_____	_____	2 5
		スポーツグループの誘発	※ ※	0.3 8 0	2 6
		大会運営へのクラブ意見の反映	_____	_____	2 9
		スポーツの条件整備	_____	_____	2 7
		奉 仕 活 動	_____	_____	2 8
		社会的理解	_____	_____	3 0

※……P&lt;0.05 ※※……P&lt;0.01



なお、分類Lb, Lcと分類Sb, Scの集団については事例数が少ないので、本研究の分析対象からは割愛することにしたので、以下分類La, Saの集団についてみることにする。

### 1. 分類La「存続年数が長く、競技レベルの高い集団（22）」の存続パターン

表62に示すように、分類Laの22集団の成員の流動性についてみると、6集団が「小」、16集団が「大」に分類される。

つぎに、表63と図6に示すように、「成員の流動性」と「交流活動」をクロスさせてみると3つのパターンができてくる。すなわち、

- ① 成員の流動性が「小」で交流活動が「少」の6集団——存続パターンLa I
- ② 成員の流動性が「大」で交流活動が「多」の7集団——存続パターンLa II
- ③ 成員の流動性が「大」で交流活動が「少」の9集団——存続パターンLa III

これらの存続パターンの特徴をみるためにつぎに主な項目間の関連をみることにする。

#### 1) 成員の流動性と年間の試合数との関連

表64は分類Laの集団について成員の流動性と年間の試合数との関連をみたものである。両者は有意に関連しており、成員の流動性の「大」の集団では年間の試合数が多くなっている。

#### 2) 交流活動と年間の試合数との関連

表65は分類Laの集団について、交流活動と年間の試合数との関連をみたものであるが、両者間には有意な関連はみられない。

3) 存続パターン（La I, La II, La III）と親和度（人間関係に対する満足度、クラブ活動における人間的接触の満足感）との関連

表61 集団の分類（存続年数×競技レベル）

存続年数	競技レベル	集団数	分類
C群・D群(6年以上)	高(1.2部)	22	La
	中(3部)	6	Lb
	低(4.5部)	2	Lc
A群・B群(5年以下)	高(1.2部)	1	Sc
	中(3部)	6	Sb
	低(4.5部)	19	Sa

表66は3つの存続パターンと成員の感じている「人間関係に対する満足度」および「クラブ活動における人間的接触の満足感」との関連をみたものである。

これによると、存続パターンLa I, La IIは、存続パターンLa IIIと比較して、集団の人間関係やクラブ活動における人間的接触の満足感に対して肯定的反応を示しているものが多い。

#### 4) 存続パターン（La I, La II, La III）と職業、運動経験、大会出場経験との関連

表67は存続パターンと職業、学校時代の運動部所属経験、大会出場経験との関連をみたものである。これによると、存続パターンLa Iは、専業主婦、学校時代の運動部経験、高いレベルの大会出場経験者が多くなっている。

以上の分析結果をまとめてみると、分類Laの集団の存続パターンの特徴は次のようになる。

存続パターンLa I, La II, La IIIは、存続年数が長く、競技レベルが高いことでは各パターンとも共通であるが、これらの集団は成員の流動性の違いによって2つに分けられる。そして、成員の流動性は交流活動や年間の試合数、その他の要因を規定し、独自の存続パターンを形成している。すなわち、存続パターンLa Iは成員の流動性が小さい場合にみられる典型で、発足時の成員が多く残留している。したがって、現在の交流活動は少なく、年間の試合数も少なくなっているが、発足当時以来の長期間の親交関係が集団内の人間関係や人間的接触などに対する満足度、いわゆる親和度を高めており、これらの要因が相互に関連し合って、高い競技レベルを維持し、集団を存続させるに必要な条件が形成されていると思われる。このパターンの成員には、学校運動部経験者がきわめて高率をしめており、学校時代の高いレベルの大会出場経験者が多く、また、専業主婦が多い。

存続パターンLa IIは、成員の流動性が大きい場合にみられる典型である。現在の交流活動や年間の試合数が多く行われ、成員間の接触回数が多いため、成員の加入・離脱が多いにもかかわらず、集団の人間関係や人間的接触などの親和度が高く維持されている。これらの要因が相互に関連し合って、高い競技レベルが維持され、集団の存続に必

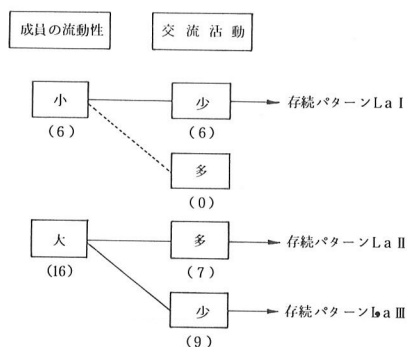


図 6 分類 La の存続パターン (成員の流動性×交流活動)  
( ) 内は集団数

表62 成員の流動性 (分類La)

		N	成員の流動性	
			小	※ 大
分類 La	存続年数(6年以上) 競技レベル(1,2部) の集団	22	6	16

※ここでの「大」には注3で区分された「中間」と「大きい」の2カテゴリーをあわせたものである。

表63 成員の流動性×交流活動(分類La)

		N	交流活動	
			「多」	「少」※
成員の流動性	1 小	6		100 (6)
	2 大	16	43.8 (7)	56.2 (9)

※ここでの「少」は注2で区分された「普通」「少ない」「なし」の3カテゴリーをあわせたものである。  
 $P < 0.05$   $\sqrt{cr} = 0.371$

N=56

ある (12.5)	経験はないが、今後意志あり (64.3)	今後も意志なし (23.2)
--------------	-------------------------	-------------------

図 6 社会的活動への参加 (スポーツ条件の整備, 奉仕活動など)

表64 成員の流動性×年間の試合数(分類La)

		N	年 間 の 試 合 数	
成 員 の 流 動 性	小	6	「多」	「少」
			50 (3)	50 (3)
	大	16	31.3 (5)	68.7 (11)

$P < 0.01$   $\sqrt{cr} = 0.497$

表65 交流活動×年間の試合数(分類La)

		N	年 間 の 試 合 数	
			6 試合以下	7 試合以下
交 流 活 動	「多」	7	25 (2)	75 (5)
	「少」	15	40 (6)	60 (9)

N, S

表66 存続パターン (La I, II, III)×(人間関係, クラブ活動における人間的接触の満足感)

	N	人 間 関 係			クラブ活動における人間的接触の満足感			
		非 常 に 満 足	ま だ 満 足	あ ま り 満 足 で な い	よくある	ときどきある	ときたま	ない, どちらともいえない
存続パターンLa I	27	40.7	55.6	3.1	37.0	40.7	14.8	7.4
存続パターンLa II	84	41.7	53.6	4.8	33.3	38.3	12.3	16.0
存続パターンLa III	77	19.5	72.7	3.9	16.9	32.5	20.8	28.6
計	188	34.0 (64)	61.7 (116)	4.3 (8)	27.2 (50)	36.4 (67)	16.3 (30)	19.7 (37)

$P < 0.05$   $\sqrt{cr} = 0.176$

$P < 0.01$   $\sqrt{cr} = 0.161$

表67 存続パターン (La I, II, III)×(職業, 運動部経験, 大会出場経験)

	N	職 業		運 動 部 経 験		大 会 出 場 経 験	
		専 業 主 婦	パート定職	あ	り な し	県大会以上	それ以下
存続パターンLa I	27	70.4	29.6	92.5	7.4	48.1	51.9
存続パターンLa II	84	59.5	40.4	78.6	21.4	28.6	71.4
存続パターンLa III	77	66.6	33.4	79.4	20.5	28.2	71.7
計	188	62.2 (117)	37.8 (71)	82.0 (154)	18.0 (34)	33.3 (63)	66.7 (125)

N, S

N, S

N, S

表68 集団の具体的目標 (分類 Sa)

分類 Sa	N	集団の具体的目標	
		ある	なし
存続年数短い (5年以下) 競技レベル (4.5部)の集団	19	8	11

表70 練習活動×交流活動 (分類 Sa)

		N	交流活動	
			「多」	「少」
練習活動	多	8	62.5 (5)	37.5 (3)
	少	11	9.1 (1)	90.9 (10)

$P < 0.05$   $\sqrt{cr} = 0.567$

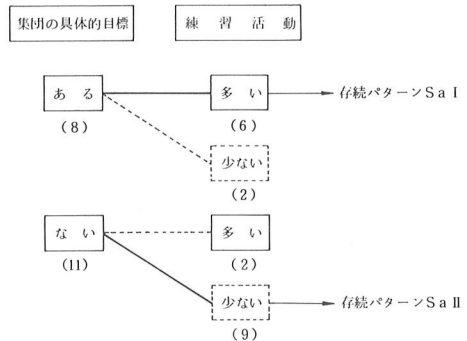


図7 分類 Sa の存続パターン (集団の具体的目標×練習活動)  
( ) 内は集団数

表69 集団の具体的目標×(1.練習活動・2.交流活動・3.試合参加状況・4.練習の参加状況・5.人間関係・6.出場選手決定の原則)

集団の具体的目標	N	(1)練習活動		(2)交流活動		(3)試合の参加状況			(4)練習の参加状況			(5)人間関係			(6)出場選手決定の原則	
		多い	少ない	多い	少ない	非常に多い	まあまあ	あまり	非常に多い	まあまあ	あまり	非常に多い	まあまあ	あまり満足でない	全員	勝利志向
ある	8	75.0 (6)	25.0 (2)	62.5 (5)	37.5 (3)	25.0 (2)	62.5 (5)	12.5 (1)	75.0 (6)	25.0 (2)	75.0 (6)	75.0 (6)	25.0 (2)	25.0 (2)	37.5 (3)	62.5 (5)
なし	11	18.2 (2)	81.8 (9)	9.1 (1)	90.9 (10)		36.4 (4)	63.6 (7)	18.2 (2)	72.7 (8)	9.1 (1)	27.3 (3)	45.5 (5)	27.3 (3)	72.7 (8)	9.1 (1)
		$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.568$		$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.567$		$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.576$			$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.575$			$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.510$			$P < 0.05$ $\sqrt{cr} = 0.508$	

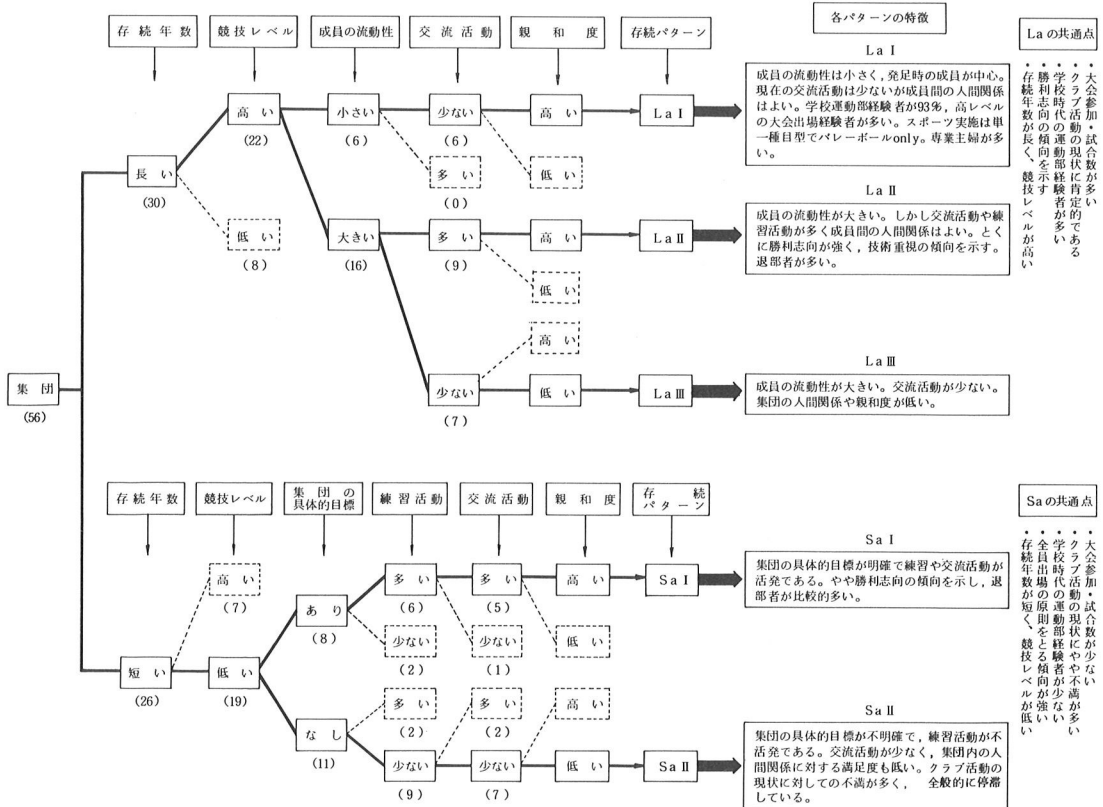


図8 集団の存続パターンの模型図 ( ) 内は集団数を示す。

要な条件が形成されていると思われる。また、退部者が多い。

存続パターンLaⅢは、成員の流動性が大きく、交流活動が少ない場合にみられるものである。このパターンは、成員の加入・離脱が多いにもかかわらず、交流活動が少なく、それ故に、成員間の人間関係や人間的接触などの親和度が存続パターンLaⅠ, LaⅡより低下すると思われる。

## 2. 分類 Sa「存続年数が短かく、競技レベルの低い集団(19)」の存続パターン

1では分類Laの存続パターンの特徴をみたので、つぎに、分類Sa「存続年数が短く、競技レベルの低い集団(19)」の存続パターンの形成とその特徴を簡単にのべ、分類Saの存続パターンとの比較を試みたい。

存続年数が短く、競技レベルの低い集団は集団の具体的目標によって存続パターンが強く規定されている。この点、成員の流動性によって規定されている分類Laの存続パターンとは違いがみられる。

表68、図7に示すように、分類Saの集団は、集団の具体的目標(あり、なし)によって2つに分けられる。また、表69(1-6)に示すように、集団の具体的目標は練習活動<sup>注4)</sup>、交流活動、試合の参加状況、練習の参加状況、集団の人間関係と関連がみられる。すなわち、大会や試合での目標が明確な集団は、練習活動や交流活動を多く行っており、さらに、試合や練習の参加状況がよく、集団の人間関係における満足度も高くなっている。また、やや勝利志向の傾向を示す。これを存続パターンSaⅠとする。

一方、集団の具体的目標が不明確な集団は、練習活動や交流活動がともに少なく、集団の人間関係における満足度は存続パターンSaⅠと比較して低くなっている。練習や試合の参加状況は全般的に低滞している。これを存続パターンSaⅡとする。

以上説明をしてきた諸関係を各存続パターン別に模型図として描いたものが図8である。

図にみるように、存続年数の長い集団の多くは、競技レベルが高く、成員の流動性では「大きい」、「小さい」の2つに分岐する。成員の流動性の「小さい」方は交流活動が「少ない」方向に進むが、

集団の親和度は高く、よい人間関係が維持される。(存続パターンLaⅠ)

また、成員の流動性の「大きい」方は交流活動によって2つに分かれ、一方は交流活動の「多い」方へ、他方は「少ない」方向へ進む。前者は親和度が高く、よい人間関係が維持されている(存続パターンLaⅡ)。後者は前者と比較してそれらが低くなる(存続パターンSaⅢ)。

一方、存続年数が短い集団の多くは、競技レベルが低く、集団の具体的目標では「ある」「なし」の2つに分岐する。前者は練習活動や交流活動が多い方向に進み、親和度が高くなる(存続パターンSaⅠ)。後者は、練習活動や交流活動が少ない方向に進み、親和度が低くなる(存続パターンSaⅡ)。

このように、集団の諸構成要素は相互に関連し合いながら、それぞれの諸構成要素の特性によって、集団は独自の存続パターンを形成していることがわかる。

## IV 要 約

以上、地域スポーツ集団の存続に関与する要因とスポーツ集団の存続と変容の過程について、集団の外部的条件に比較的共同点の多い津市婦人バレーボール集団の調査結果の分析から究明を試みた。結果を要約すれば、次のようになる。

1) 集団の存続は競技レベルと強い関連があり、存続年数が長くなるにしたがって、競技レベルは向上し、勝利志向への傾斜を強める。競技レベルは集団の存続を規定する強い要因であると思われる。

2) 集団の存続は成員の学校時代の運動経験と強い関連があり、存続年数の長い集団の成員は学校時代の運動部経験が豊富で、とくにバレーボール部経験者が多い。

3) 集団の存続は、成員の運動経験によって規定されており、集団は存続年数が長くなるにしたがって、運動経験や技術レベルの高い成員を求めようになるとと思われる。

4) 集団の存続は成員の流動性と関連があり、存続年数の長い集団は成員の流動性が大きく、成員の新陳代謝が適切に行われている。

5) 集団の存続は交流活動と関連があり、存続年数の長い集団は交流活動を多く行っている。ま

た、交流活動は集団の存続を規定する要因であると思われる。

6) 集団の存続は年間の試合数と関連があり、存続年数の長い集団は年間試合数が多くなっている。年間の試合数は集団の存続を規定する要因であると思われる。

7) 集団が存続することによって、集団自体が地域のスポーツグループの生成を誘発する機能を果しているが、地域社会におけるスポーツ条件の整備などの社会的活動への参加を促進したり、大会や試合の運営への主体的参加を強めたり、またスポーツ問題を社会的次元で考えるように成員の態度を変容させる可能性は低いと思われる。

8) 存続年数の長短によって、成員のクラブ所属継続の目的やクラブ活動の効果に対しての認識に大きな差異がないこと、そしてクラブ活動の効果に対して全般的に高い効果を認めていることなどは、津市婦人バレーボール集団の日常的練習活動がほぼ同じ形態であり、活動内容が類似していることからもたらされるものであると思われる。仮説の段階では、存続年数の短い集団は多様なクラブ活動の動機や目的をもっている成員やクラブ活動の効果に対する満足度においても多様な受けとめ方をしている成員によって構成されていると仮定したが、その傾向を実証するデータをうることはできなかった。

9) 軟式野球チームの事例研究は、集団が存続するための外部的条件として、①安定した集団的基盤、②練習に利用できる施設、③集団目標に適合した組織・大会、の3要因を明らかにしているが、本研究の場合、これらの外部的条件と集団の存続年数とは関連がみられなかったが、これらの外部的条件がスポーツ集団を規定していないのではなく、津市婦人バレーボール集団は、これらの条件を十分に確保しているとみるべきであろう。

最後に、津市婦人バレーボール集団の存続と変容のプロセスを素描してみることにする。

集団は同じ学区に居住する30代の主婦を中心に結成される。結成初期においては集団の具体的目標が明確である場合には、練習や交流活動が活発であり、集団のまとまりが醸成される。やがて年数が経過すると、集団の競技レベルは向上して、集団は成員が固定化する集団と成員の加入・離脱

の大きい集団との間に特徴がみられてくる。前者は、結成当時の成員によって構成されており、コミュニケーションの場としての練習や交流活動は少ないが、長期間のクラブ活動参加によって高い技術レベルと成員の親和度が維持されている。

後者は、交流活動の差異によって2つに分かれる。両者とも、技術レベルの高い成員を求め高い競技レベルの維持をはかることにおいては共通しているが、一方の集団は成員のコミュニケーションの場としての練習や交流活動を活発に行い、その結果集団の課題達成機能や集団維持機能が高められ、集団の存続に必要な諸条件が満足されていくものと思われる。他方の集団は交流活動が少なく、集団の親和度が相対的に低くなっている。しかしいずれの集団においても、集団は存続することによって勝利志向の傾向を強めるようになる。

このように、地域スポーツ集団にはきわめて多くの外部的・内部的要因が関与していると同時に、これらの諸要因は相互規定的関連を保持しながらダイナミックに、それぞれの集団の存続・発展を規定していると思われる。このことは、すでにみたように、地域スポーツ集団が存続していくプロセスのなかで、いくつかの存続パターンを形成していることからもうかがい理解されるところである。

## 結 語

どのような地域社会に、どのような地域スポーツ集団が育ってくるのであろうか。どのような集団の外部的条件のもとには、どのような集団の内部的条件が対応しているのであろうか。このような視点をふまえながら、本研究では、地域社会を成立基盤にしている地域スポーツ集団が、一定の外部的条件のもとにおかれている場合、集団が存続していくことによって、集団にはどのような変容がみられるかを、おもに集団の内部的条件に視点をあてて究明し、前項で要約したようないくつかの知見をうることができた。

しかし、わが国における地域スポーツ集団の現状をみると、地域社会の諸条件はきわめて多様であり、それに対応して育ってくるスポーツ集団も、これまた多種多様であるといわなければならない。そのため、これらのスポーツ集団と地域社

会との関係を究明する課題は興味深いテーマであるが、それを体系的に究明することは、困難な作業を必要とする。本研究は、この課題へのアプローチの道程に一つの基礎的データを提供したにすぎないかも知れない。しかし、本研究でとりあげたような地域スポーツ集団に関する事例研究の多くを、地域社会との関係のなかで、今後とも克明に調査研究することによって、地域社会とスポーツ集団の影響関係の解明が可能になるであろうと考える。

## 付 記

本研究は、昭和51～53年度文部省科学研究費総合研究A：「コミュニティ・スポーツに関する社会学的研究—国民体育大会が地域住民のスポーツ活動におよぼした影響の追跡的研究—」（代表者 藤田匡肖）の研究の一部である。

### 注 1

スポーツ実施のタイプ

1年間に実施したスポーツの種目、回数から、スポーツの実施を、次の基準にもとづいてタイプ分けした。

単一型：クラブ活動のバレーボール以外に、スポーツ活動を実施しなかったもの

複合型Ⅰ：1種目、月1回以下程度のもの

複合型Ⅱ：2種目～3種目、月1回以下程度のもの

総合型：4種目以上、月2回以上程度のもの

### 注 2

交流活動は、スポーツ活動とは別に行われる成員の親睦や交流を深めるための行事のことで、本調査では、旅行、ハイキング、会食ミーティング（コーヒー談話会などを含む）などの回数を調べ、それを一定の基準にもとづいて、四つの段階に分類した。

### 注 3

流動性は、集団の存続年数と成員の集団所属年数との関係から、次の基準によって分類した。

1) 結成4年以内の集団は除いた。

2) ①流動性の「小さい」は、存続年数の初期 $\frac{1}{3}$ の期間に加入した成員が現構成員の $\frac{2}{3}$ 以上しめている集団

②流動性の「大きい」は存続年数の最近の $\frac{1}{3}$ の期間に加入した成員が現構成員の $\frac{1}{3}$ 以上をしめている集団

③流動性の「中間」は、①と②に該当しない集団

### 注 4

練習活動

練習回数と練習の参加状況の2つの基準にもとづいて、集団の練習活動の程度を4つに分け、それと他の項目との関連をみたが、この表には、4つのカテゴリーを2つにあわせてまとめている。

## 文 献

- 1) 寺沢猛。地域スポーツ集団の社会学的研究—スポーツ集団の形成と存続・発展に働く社会的要因。豊田工業専門高等学校紀要 I: 69-85, 1968.
- 2) 中島豊雄。地域スポーツ集団の社会学的研究—軟式野球チームの存続と崩壊。名古屋大学教養部紀要 16: 59-84, 1972.
- 3) 丹羽 昭。運動部の集団機能とPM式リーダーシップとの関係。体育社会学研究 7: 123-140, 1978.
- 4) 東山千鶴子、丹羽 昭。規範決定の権限からみた運動部の構造の検討。体育学研究 12 (1): 8-16, 1967.
- 5) K. Kageyama, T. Terasawa, H. Nishigaki, T. Nakashima: The social factors affecting the formation and development of baseball teams in community. *Research Journal of Physical Education* 16 (6): 309-318, 1972.
- 6) 湯谷登、大槻寅之助、川北智世、荒田勝美。市民スポーツクラブ安定化要因についての研究。日本体育学会第27回大会号 P: 329, 1976.
- 7) 川西正志、前川峯雄。生涯スポーツの見地から見たスポーツクラブの存続性に関する研究。中京体育学研究 20 (2, 3): 69-80, 1980.
- 8) J. Cikler. The rise, the development and extinction of a soccer team of boys. *International Review of Sport Sociology* 2: 33-46, 1967.
- 9) Homans, G. L. (1950), 馬場明男、早川浩一訳。ヒューマングループ, 誠信書房, 1959.

(1980年2月13日受付)

